

福岡地域で得られた HIV の免疫耐性

保健科学課 川本 大輔・宮代 守

樋脇 弘

九州医療センター 高橋真梨子・南留美・山本政弘

第 24 回日本エイズ学会学術集会

HIV は、HLA クラス I 分子により感染細胞上に提示される HIV 蛋白の一部を変異させ、細胞傷害性 T 細胞 (CTL) による認識から免れる免疫逃避機構をもつ。そこで HLA-B51 が提示する HIV のエピトープである I135X (RT 領域の 135 番目のアミノ酸であるイソロイシン) の変異について、福岡地域の感染者について解析を行った。2000 年以前に受診した感染者 8 名から得られた HIV の I135X を解析したところ、HLA-B51 を持っている感染者は 2 名で、2 名全てに変異が見られた。一方 HLA-B51 を持たない感染者は 6 名で、うち 3 名 (50%) に変異が見られた。同様に 2007 年以降に受診した感染者 38 名から得られた HIV の I135X を解析したところ、HLA-B51 を持つ感染者は 5 名で、5 名全てに変異が見られた。一方 HLA-B51 を持たない感染者は 33 名で、うち 26 名 (79%) に変異が見られた。HLA-B51 を持たない感染者において、2000 年以前では変異ウイルスの割合が 50%であったが、2007 年以降では 79%と高い確率であり、HIV には CTL からの攻撃を免れるような変異が蓄積していた。このことから免疫能の低下が早まって病気の進行が早くなるという AIDS 発症の早期化が危惧された。